



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 地球 1933, 20(4): 315-318

ISSUE DATE:

1933-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184203>

RIGHT:

定價一圓六十錢

長井君が山形師範に居て、其郷土地理の闡明に粉骨碎身してゐることは、君を知る人の共に推服してゐる所であるが、君が師範に奉職して六年間、東奔西馳して蒐集した資料は遂にこの菊版二六二頁の縣誌となつた、地形火山、湖沼氣候産業交通人口聚落及地理區の九章よりなつて其説述極めて簡潔要領をつくしてゐる中に、筆者はその産業篇から誠に多くの珍らしい智識を得た、聚落篇は著者の特に造詣がふかい丈けに、珍らしい新開地の移りかはつてゆく姿が見えて、宛然たる一文化史たるの概がある、地誌としては、この外に記すべき多くの事項があるとは考へるけれども、普通の府縣志とちがつて、清新な味を多分にもつことは本書の特色であると信ずる(藤田)

雜報

○工業國としての印度

印度は天與の資源を保有して長く農産の國として天下に知られ、英國の穀倉であると信じられてゐる、しかし近代産業主義の風潮は印度工業勃興の氣運を促し國民主義の運動と相俟つて印度國內の製造工業は發展しはじめ、自ら保護關稅の問題が起ることになつた、熱帶地に工業が起らぬといふことは云へない時勢になつた、これは印度が他の熱帶とちがつて、其歴史も古く文化の高い自然の勢である、元來印度は十九世紀の初期までは殷盛なる商工

業國であつて其絹及綿織物は上古以來聲價を認められ歐洲に多量の輸出があつたのみでなく印度の機械術、染色法、金屬細工、寶石細工、香水製造其他の技巧は一段とすぐれたものであつた、然るに東印度商會が印度に君臨してこの方、其政治的勢力を利用して、印度工業を漸次衰滅に導き印度を英國の市場に變形してしまつたのである、これはアングロサキソン民族の狡猾さを如實に語るものである、一七六九年三月十七日附の東印度商會本社からベンゴール支店宛の手紙には印度織物の抑制を要望し絹工業の家内作業を禁止し、商會附屬工場内で就業せしめよと云つてゐる、さうして彼等千年の誇るべき工業を全く破滅してしまひ、一八二三年には印度産絹織物及絹綿交織物は全然英國市場から影を没するに至り、印度よりの重要輸入品たる綿織物に六割七分の關稅を加へて英國内の工業を保護した、そこで印度の織物工業は行きつまつて反對に英國の機械による安價な綿製品が漸次東方の各領地に其姿を顯はしたので工業國印度はまたくまに農業國印度に墮落した、ひとり綿工業のみでなく、造船業でも、一八〇〇年にはベンゴールの豊富な木材で現に一萬噸の印度製航洋船舶がカルカッタ港に集合してゐる、それで英印貿易に必要な船腹は印度造船所に於て出來るといひ、ロンドンの造船業者は著しく脅威を感じたものであつた、英國のこの手段は現在日本の綿業に向つても行はんとする所であるが、日本の立場といひ時代もかはつたので思ふやうにはならないけれ

ども、英人の爲す所は餘程注意せなくてはならぬ。實際に英國の領有となつた爲に、印度の工業は亡んだ、しかしそれが近來再び擡頭したのは實は一八八八年の印度饑饉のあつた後其對策として工業獎勵を必要としたのに始まる、一八八五年國民會議派の創立後彼等は工業教育の創設、政府用品製造工業の助成、印度技術工人の授職獎勵をはじめたので一九〇五年には官民有識の工業會議を開くに至つた、恰もよし日露の大戦で日本が勝つたことが印度の人々に異常なショックを與へた、そこで一九〇七年以内に紡績工業、石鹼工業、燐寸、鉛筆、刃物等の工業會社が簇出したが、印度政府は英國の利益を慮つて之を徹底的にやらなかつた、けれども歐洲戰爭がはじまるや、工業製品に對する未曾有の需要が起つたので、印度政府も我を折つて、一九一五年には全印度の利益の爲に確固たる工業政策を建てることになり、調査、工業教育、技術教育、商工業上の情報供給技術及財的に直接に補助をすることゝなつた、かくて一九二二年にはマドラス省工業保護法が出来て七つの工業會社が補助金をうけ、カルナチツク製紙工場の如き成績最も見るべきものとなつた、ついでパンジャブ州工業資金法、ハールオリツサ州工業補助法が出来た、工業の保護促進につれて、印度の關稅自主權を取り戻すことが考へられ、保護關稅主義をとることになり、常設の關稅調查會を置き、英國との特惠制度をも考ふるやうになつた、そこで日本の綿糸綿布の侵入に對してランカシヤの運動が効を奏して

七割五分といふ禁止税をかけるに至つたのであるが、それは必しも印度の工業の保護でなくて、印度の農民を苦しむことになりかけてゐる、印度を犠牲にして英國の工業を保護するといふ實際の結果をみた、特に、印度の人々はとうするであらうか、それにしても印度大衆の爲めに、日本はどうすべきであるか、宜敷日本人も印度で工業的企業をやつてはどうか、印度の工業の發達によつて英本國との利害が一致しない時節は屹度くるであらうと考へるから、我々は一面工業印度の確實なる進歩を望まねばならぬ。

○廣東の生糸

慶長元和の昔、黃糸又は北絹と稱して我國に輸入された廣東の生糸も、日本の明治維新以後の生糸の隆盛に押されて廣東の糸は歐洲へも向けることが出来ず、印度のみが仕向地になつてしまつた。従前廣東からは米國へ三萬乃至五萬俵英國へ五百乃至一千俵佛國へ一萬乃至一萬五千俵を輸出する例であつたが、それが近頃は對印貿易にかはり

昨年は印度へ五千四百十俵を仕向けた、しかもその増加の傾向は止まない、其理由は廣東生糸の品質が改良されたためでない、廣東生糸が殆ど世界に進出が出来なくなつた結果、四面楚歌の苦境から印度へ販路を求めたのである、本年初頭のごとき廣東糸は品質が悪いので、封度當り米貨七、八十仙に暴落し生産費以下になつた、が、幸に印度人は生糸の品質を重視しない古い習慣で之を貴ぶから、華僑の手で之を輸出し、印度の貨物を支那へ輸入するやうになつた結果である、或はこ

のためにこの方面へ永久的に捌け口をみつけるであらうと云はれる。

○東蒲塞國モンコレイ鐵道 一九三三年七月三

日カムホチヤのバツタンバン及モンコレイ間の鐵道が開通し國王シヅワット・モニヴォン及理事長官臨場の下に其開通式が行はれた、この鐵道は昨年五月に出來たブノムベン、ブルサト間、ついで十二月に出來たブルサト、バツタンバン間の鐵道の延長でブノムベンから三百三十一軒を通じた、建設者は南部印度支那鐵道會社であるが、七月一日から毎日客車及貨車を各一列車づゝ運轉してゐる、まだ乗客や荷物の動きが少いのである、しかしこの線により暹羅國への陸路連絡が樂になり、この國の中央部に存在する太湖の漁獲物及其沿岸の農産物輸出をも増進するものと考へられる、ことにバツタンバン地方は米の主要産地で年十萬廻の靱をサイゴンに輸出する所であり林産及鑛産が多い、有名なアンコルの佛蹟へもこの線によつて訪ねられやすくなつたのである。

○米國の棉花綿織物の發達

世界の人類がすべて衣服をつけるとなると年額四二、〇〇〇、〇〇〇俵の棉花が入川となるといふことであるが、その綿布はもと印度の原産で歐洲に齎らされたのでカリコといふ語は印度のカリカットから

○陸地測量部出版地圖目錄 (昭和七年十二月廿五日)

起リモスリンといふ語はメソポタミヤのモスル市から起つたキャンブリックといふ語も綿布を最初に製造した佛國の小村の名である、米國の棉花は一七八九年にジョージア州サウアナから僅に一俵を輸出したが、一七九三年ウイットニーが棉繰機を發明してから其栽培が盛んになつた、一八〇三年四一、〇〇〇、〇〇〇封度を英國に輸出してから以來大に發展し一八三〇年には二七一、〇〇〇、〇〇〇封度を輸出した。

一七九〇年ロードアイランドのポーターケツトに米國最初の紡績工場が出來二十年度には工場數が七五九にもなつた、爾來年を追ひ紡績が發達し一九三二年の棉花使用は二十四億六千萬封度羊毛使用は二億四千萬封度人絹使用は一億四千九百萬封度生糸は七億三千六百萬封度になつた、即米國では纖維工業の八四・二％は棉花である、又同年の鍾數をみると羊毛工業は四、一五三、〇〇〇生糸工業は三、一八九、〇〇〇、棉花工業は三一、四四二、〇〇〇、其織機の数ば羊毛六八、五七四臺、生糸及人絹一一三、八六〇臺、棉花六三四、八一九臺であつて全體の使用動力三、八四三、〇〇〇馬力の中棉花工業のみで二、三〇七、〇〇〇馬力即六〇％を消費するといふ狀況である。

